32

『聖済総録』鍼灸門所引の『甲乙経』について

上田善信

古代中国の鍼灸に関するものの中で、特に孔穴について考える場合には、当然『鍼灸甲乙経』（以下『甲乙経』と略称）が重要な文献であることは論を待たないが、北宋・天聖五年（一〇六六）に『銅人腧穴鍼灸図経』（以下『銅人』と略称）が刊行されたことにより、あまり『甲乙経』は刊行されなくなった。そして南宋の『鍼灸資生経』や明初の『医学綱目』などに引用が見られる程度になった。

しかし古代の孔穴に関する典籍の多くが亡佚している現在では『甲乙経』が古代の孔穴の学を伺うことのできる資料であり、『明堂』の復元（穴の位置、所属経脈、主治症など）の検討や隋唐時代の鍼灸を研究する場合にも関わってくる。

よって『甲乙経』の孔穴に関する条文は、孔穴の配列、位置、所属経脈などについて多くの情報を含んでいるので、孔穴の研究において非常に重要な文献である。

『甲乙経』を検討する場合には、『千金方』や『外台秘要方』のように宋版があるわけではないので、現在では古今医統正脈全書本（以下医統本と略称）、明藍格抄本（以下明抄本と略称）、鈔正統本（以下正統本と略称）の三種の版本を用い、さらに『素問』宋臣注、『資生経』、『医学綱目』などを校勘資料として用いざるを得ない。

北宋・徽宗の勅命により政和年間（一一一一～一一一八）に編纂された『聖済総録』全二百巻は宋代最大の医学全書である。その厖大な内容の中に宋代以前の医学書の引用があり、巻百九十一～巻百九十四にある鍼灸門にも『甲乙経』の引用が見られる。その引用条文がどのようなものであるか検討を行ったので結果を報告する。

鍼灸門にみえる『甲乙経』の引用については「甲乙経云」と明示がある全三十五条について検討を行った。巻百九十二（十一条）、巻百九十三（十六条）、巻百九十四（八条）であるが『甲乙経』巻十一からの引用一条を除

く三十三条が『甲乙経』巻三からの引用である。また巻百九十四治鬼魅諸邪病灸刺法の「旁庭二穴、甲乙経云、穴在脅堂下二骨間陥者中、挙腋取之、各灸三壮。主卒暴中飛尸遁尸、胸脇支満、時上搶心、嘔吐喘逆、咽乾脇痛（『外台』無各字、下尸作及）」の旁庭穴は『甲乙経』には見えず、『千金方』ではなく『外台秘要方』巻三十九からの引用である。

『甲乙経』の引用は、節略したものであって全文を引用している訳ではない。例えば、巻百九十四治婦人諸疾灸刺法「灸関元七壮、…甲乙経云、小腸募也、一名次門、在臍下三寸、足三陰任脈之会。刺入二寸、留七呼、灸七壮」（傍線部のみが鍼灸門の引用部分）。

さらに医統本・明抄本・正統本とはかなり異なっているものが多い。例えば巻百九十二治咳嗽灸刺法「灸膻中三壮、…甲乙経云、一名元兒、在玉堂下一寸六分、直乳両間陥中①、任脈気所発、炷如半棗核大②」（①医統本無直乳両間陥中六字、明抄本・正統本作陥者中②医統本・明抄本・正統本無炷如半棗核大六字）、巻百九十三治失欠灸法「通里二穴、…甲乙経云、手少陰絡①、在腕後一寸、走②手太陰③、各④灸五⑤壮」（①医統本・明抄本・正統本絡作経、②医統本・明抄本・正統本走作別走、③医統本・明抄本・正統本陰作陽、④医統本・明抄本・正統本無各字、⑤医統本・明抄本・正統本五作三）。

以上のように、『聖済総録』鍼灸門における『甲乙経』の引用は巻三の孔穴条文を節略引用し、施灸条文に「各」字や艾炷の形状を付加したもので、医統本、明抄本、正統本の各版本と比較しても異同が多いことが分かる。このことは『聖済総録』に引用された『甲乙経』は現伝の版本とは別の版本である可能性が考えられるが、あまりにも異同が多く引用の正確さに疑問がある。ただ鍼灸門には『千金方』『千金翼方』『外台秘要方』なども引用されており、それらの文献の引用のされ方を確認するまでは結論を保留すべきであろう。

（日本鍼灸研究会）